研究だより

春号

2019年 6月28日（金）

研究発表大会の内容

研究発表	公開授業
分科会	講　演

講演講師　国士舘大学　教授　澤井 陽介 先生

研究テーマ

小中一貫教育への歩みを通して、深い学びの在り方を探る（２年次）
～「見方・考え方」が働く問いを子どもがつかむためには～

附属光学園
山口大学教育部附属光小学校・中学校

※本研究発表大会は、教員免許状更新講習の対象となります。

１月の公開授業研究会では、多くの方に御参会をいただき、ありがとうございました。たくさんの御意見や御助言を基に、研究を進めることができました。研究だより春号では、そのときの様子をお伝えいたします。

この度の研究発表大会では、公開授業研究会での成果と課題をうけて、「『見方・考え方』が働く問いを子どもがつかむためには」という研究のテーマで公開授業を行います。多くの方の御参会をお待ちしております。よろしくお願いいたします。

国語科

国語科では、子どもが、言葉の働き方に気付くような問いをつかませていきたいと考えます。そこで、他者との意見の違いが明らかになる交流の場や、既習の教材文と比較する場などを設けていきます。そうすることで、教材文を読めている、理解したと思っていた子どもが、「もう一度読みたい」という思いをもち、自分事として問いをつかめると考えるからです。このようなことを通して、「言葉の意味や働き、使い方に注目して、互いの思いや考えを伝え合うことのよさを感じることのできる子どもたち」の実現を目指します。

小学校１年「夕日のしずく」（三省堂１年）

子どもの意見の違いから、主眼達成につながる問いをつかませたいと考えました。しかし、問いについての対話が活性化されなかったことから、自分事として問いをつかんだとは言い難い状況でした。意見の違いから問いをつかませるためには、まず、子ども一人一人が熟考した意見をもっていることが欠かせないことを感じました。熟考したものが、他者とは違うときにこそ、他者の意見に疑問をもったり、自分の意見を再考したりするようになると考えるからです。

（住江　めぐみ）

小学校４年「くらしの中の和と洋」（東京書籍４年下）

「どうして筆者は、中③だけ説明順序を変えているのかな」という問いをつかませるために、和と洋の説明順序を確認した後、説明順序の違いが引っかかる理由を交流する場を設けました。子どもは、同じ順序で説明するよさを想起し、教材文と比べることで、違和感を抱き、問いをつかむことができました。しかし、問いに対する納得解を見出せたのは、一部の子どもだけだったため、今後は、読み手の納得度の違いがより鮮明になるような比較文を提示していきたいと思います。

（田中　章憲）

中学校２年「君は『最後の晩餐』を知っているか」

「どうして伝えたいことの方が分かりにくいのだろう」という問いをつかませるために、意味段落ごとにある「かっこいい。」という表現を比較し、伝えたいことと分かりやすさのずれに気付かせました。子どもは、根拠の示されない内容を断定するような主観的な表現に目を向けることができました。しかし、文章中の３カ所の「かっこいい。」に焦点を当てるような見せ方をしたため、一部の叙述にのみ着目する子どもの姿も見られました。今後は、細かく叙述に目を向けさせながらも文章全体に視野を広げ、自分の読みを吟味できるような問いを設定していきたいと考えます。

（作花　麗美）

社会科

社会科では、子どもが、よりよい社会とはどのようなものなのか考えるきっかけとなるような問い（社会の成り立ちに関する理解を深めていけるような問い）をつかませていきたいと考えています。

そのために、社会的事象について、子どもにとって身近な場面や、単元を通して生まれた事実から問いを生み、探る場を設定します。

そして、実社会やそこに生活する人々に共感したり、他の現実と対比したり，経緯を探ったりすることで、問いの背景にある社会の成り立ちを捉える子どもを育てたいと考えています。このような社会科の学習を通して、社会の在り方を探り、参画していく子どもを育てていきたいと思います。

小学校５年「ワンクリックの先にある社会～社会を変える情報～」

「インターネット販売が進むことで生まれる不利益を減らすにはどうすればよいか」という社会に関わる問いをつかませるために、インターネット販売の即日到着が可能となる理由について探る場を設けました。子どもは、「生活は便利になるけど、実は困る人がいるのだ…」という思いをもち、本当の便利とは何なのか思いを巡らせました。今後は、子どもが問いを深めていけるような場や状況の設定の工夫をさらに探っていきたいと思います。　（才宮　大明）

中学校１年「オセアニア州」

本時では、「フランスがニューカレドニアを手放さない理由は何か」という問いをつかませるために、フランスが毎年1700億円を援助している事実や、広範な自治権を与えていることを提示しました。今後は、オセアニア州の地域的特色に迫れる展開が必要になると考えています。　（関本　努）

図画工作科・美術科

図画工作科では、子どもが、素材や材料と豊かに関わる中で、形や色などの造形的な視点に着目できるような問いをつかませていきたいと考えています。そのために、子どもの実態や発達の段階に応じた、自己や他者、材料と対話する場を設定します。そうすることで、友達のよさに気付いたり、自分の表現を見つめ直したりできるようにしていきたいと思います。

美術科では、図画工作科で醸成してきた子どもの思いや願いを、鑑賞や試作という形で追体験させ、「今度はこんな風につくりたい」という心の状態を大切にしたいと考えています。また、対話的な授業で子どもをファシリテートしながら、適切なタイミングを見計らい、子どもがイメージできる具体的な発問をすることで主体性を引き出すようにしていきたいと思います。

小学校１年「おって！たてて！１－２わくわくランド」

「生き物はどのようにつくるとよいのか」という問いをつかませるために、平面で表した生き物を提示し、製作したいものとのイメージのずれを生む場を設定しました。そうすることで、子どもは、前時までに製作していた建物のように、生き物も立たせたいという思いをもつことができました。しかし、建物を製作したときの方法を生かすことができないまま、「おってたてる」以外の方法に目を向ける子どもが多くいました。教師がねらっている表現方法に焦点化させるためには、「おってたてる」よさや面白さを十分に実感できていることが大切だと感じました。今後は、対象とどのように出合わせるかということについて考えていきたいと思います。　（池内　達也）

算数科・数学科

算数科・数学科では、子どもが、問題解決をしていく中で、自ら統合的・発展的に考えていこうとするような問いをつかませていきたいと考えています。そのために、数値や条件を変えて取り組むことができる状況を設定し、その結果を比較・検討する場を設けます。そうすることで、「Ａの方法はどんな場面でも使えて便利だ」「Ｂの方法は、この条件の時には有効だけど、条件が変わるとできない」といった汎用性や特殊性について、算数・数学的な思考をもって、目を向けることができると考えています。

小学校３年「棒グラフの活用」

「雨の日数が多いと、図書室の来室人数も多いのか」という問いをつかませるために、４月から11月において来室人数が最も多かった月とその理由を探る場を設けました。子どもは、実際の数値と比較することで、雨の日数と来室人数との関連性に目を向けることができました。また、「図書室の来室人数と雨の日数の二つの棒グラフを関連付ければ、12月や１月の来室人数まで予想できそうだ。」という思いをもつこともできました。今後は、扱うデータそのものに、子どもの知りたい・調べたいという必要感を生む手立てを仕組みたいと考えています。　（兼安　陽一朗）

小学校５年「帯グラフと円グラフ」

「複数のグラフを見やすく表すには、どうすればよいか」という問いをつかませるために、帯グラフや円グラフを単体で見た時と、複数並べて見た時の印象の違いを比較する場を設けました。子どもは、新入生やその保護者に、児童が光小の魅力をどう思っているかが一目で伝わるようにグラフを作り変えようという思いをもち、動き出しました。子どもは、グラフを作り変えるために、データを伝える相手を意識することが大切だということに気付きました。今後は、問いを解決するために必要な思考法を子どもが駆使できる手立てを考えていきたいと思います。

（伊藤　悠樹）

中学校１年「資料の活用」

子どもに「どの条件に対して、どちらの選手を選ぶとよいか」という問いをつかませるための手立てとして、今回は、既習内容の代表値（平均値や最大値）を基に比較し、判断することが困難な場面を設定しました。これにより、今までデータ分析の中で、あまり目を向けていなかった分布や、散らばり、データの並び順に注目することができました。また、生徒が授業の中でもやもや感をもつことが、より深い課題探求の必要感につながり、この積み重ねが多くの事象を統合し発展させることなどの探求的な学習の習慣化につながるのではないかということが見えてきました。

（中村　哲哉）

総合的な学習の時間

総合的な学習の時間では、様々な対象と関わる中で、目指したい自分の姿を明確にしていく子どもたちの姿を大切にしてきました。そのために、子どもの関心が、対象と深く関わる他者に向くように単元構成を工夫し、その人なりの対象への思いや願い、関わり方を捉えたり、その関係を支えるものを探ったりする活動を設定しました。子どもは、立場や状況が異なる他者との出会いを通して、多様な関わり方や価値観にふれ、再度、目指したい自分の姿を見つめ直すことができました。その際に生まれた現実と理想とのギャップに焦点を当てることで、「もっと～するにはどうすればよいか」、「今の自分にできることは何か」といった、自分の課題となる問いをもつことができました。

また、探究活動を進めていく中でよりよい課題解決の方法を吟味していくことができるように、各教科等で身に付けた資質・能力との関連を、教師が意識してカリキュラムを見直していきたいと思います。

理 科

理科の今回の実践では、つかませたい問いを焦点化できていなかったことが課題として残りました。そこで、子どもたちにつかませたい問いを焦点化していくために、自然事象を科学的に捉え直す問い（事実に対する問い）、課題を解決するための問い（方法に対する問い）、自然事象が起きる要因を解き明かすための問い（要因に対する問い）などを視点とし、問いと、問いをつかませるための手立てを研究していきます。そして、科学的に物事を捉え、発展的に思考することのできる子どもたちの育成を目指していきます。

小学校３年「身近なじしゃくのひみつを探れ！」

「クリップは鉄なのに、磁石から遠ざかったのはなぜか」という問いをつかませるために、磁化されたクリップに、新たな磁石を近付け、クリップが磁石から遠ざかる事象を提示しました。子どもは、「鉄は磁石に付く」という概念とのずれを感じ、磁化された鉄の性質と、これまで学んできた磁石の性質とを比較しながら、調べていきました。今後は、子どもがより解決したいと思う問いをもつための手立てや、その問いを科学的に検証可能な問いへと高めていく手立てを深めていきたいと思います。

（赤星　　冴）

小学校６年「ＴＨＥ☆ベストハウス」

「エアコンをより無駄なく使うためには、どのような制御の仕方があるか」という問いをつかませるために、学校内の電気の使用の仕方を見直す必要感につながる資料を提示しました。子どもは、エアコンの制御の仕方を考え、プログラミング機器へのプログラミングを行いました。今後は、制御の仕方をさらに焦点化していくため、前提となる事実をより明確にし、プログラミングを行う必要感を高められるよう取り組んでいきます。

（宮崎　洸佑）

体育科・保健体育科

体育科・保健体育科では、これまで、児童生徒一人ひとりが運動の楽しさを実感できるよう「知識と技能を関連付けて、主体的に課題解決に取り組み、生涯にわたって運動に親しもうとする子どもたち」を目指し、授業づくりに取り組んできました。これによって、運動領域でも保健領域でも、獲得した知識を生かして技能の習得や、知識の活用を意識した授業づくりを行うことができました。しかし、子どもの一人ひとりの課題に応じた学習活動の展開については、課題が残りました。運動が得意な子も、そうでない子も、自分の課題や問いに向かって自らが追究し、運動の楽しさを味わうことのできる子どもたちを目指していきます。

小学校６年「いきいき健康マイブックをつくろう！」
～保健　病気の予防～

「健康に過ごすために、間食で気を付けなければいけないことは何か」という問いをつかませるために、身近なお菓子や飲料に含まれる砂糖や脂肪の量について調べ、基準量と比較する場を設定しました。子どもはお菓子や飲料の食品成分表を見て、どのくらいの量があるのか数値を出し、実際に電子てんびんで調べていきました。普段食べたり飲んだりする物の砂糖や脂肪の量の多さに驚いていました。栄養教諭の話も聞き、子どもは、健康に過ごしたいという願いを基に、自分の間食の在り方や食生活を振り返り、今後の生活での必要なことについて考えることができました。今後は、食生活だけでなく、自分たちに合った生活での望ましい習慣について、自らが見出していけるようにしたいと考えています。

（田中　　歩）

生活科

生活科では、子どもが、人・もの・ことなどの対象と関わる中で生まれてきた気付きを基に、思いや願いを醸成していく過程を大切にしたいと考えています。そのために、体験活動の中での気付きを自覚化させるための表現方法や、思いや願いの実現に向けて、問いをもって次の活動へと向かわせたりするための単元構成の在り方について、さらに研究を進めてまいりたいと思います。

小学校２年「今伝えたい、『ありがとう』」

身近な人々とのつながりに目を向けて、自分自身を見つめ直すことが大切であると考え、単元初めは、家族から選んでもらった自分に関わる思い出の物をきっかけに、これまでの自分を振り返る活動を設定しました。初めて履いた靴や、お気に入りのぬいぐるみなど、思い出の物に関わる話を聞きながら、子どもは、自分にとって大切な宝物であると自覚した人や物を、「おたからカード」にかき表していきました。

本時では、「おたからカード」に込められた価値を探らせるために、「自分のカードにはどのようなパワーが入っているのか」という問いをもたせ、友達のカードと比べる活動を設定しました。子どもは「初めて」や「手作り」、「おさがり」や「大切な人からの思い」などのパワーを、思いや願いの共通点として見出し、自分の「おたから」の価値を再認識していくことができました。　（國重　裕美）

家庭科

家庭科では、子どもが生活の中から課題を発見し、それを解決していく過程で問いをつかめるようにしたいと考えています。また、計画・実践・評価をし、さらに新たな問いをつかむというサイクルをつくらせていきたいと考えています。そのために、子どもの実態を把握するアンケートや、家族へのインタビュー活動、十分な実習や実験などを行い、「分かっているのにできないのはなぜだろう」、「友達や家族はどのような工夫をしているのだろう」、「どうしたら生活がより豊かなものになるだろう」などといった思いを引き出せるようにしてきたいと思います。

小学校５年「快適生活プロデュース」

「一日入学の体育館を快適にするにはどうすればよいか」という問いをつかませるために、教室を快適にした際の作戦と比較する場を設けました。子どもは、場の特徴や状況に合わせる必要感をもち、「健康・快適・安全」等の視点から作戦を決めていきました。しかし、場所の違いばかりで相手や状況の違いに目を向けさせるのが難しかったです。今後は相手意識をもてるような題材提示や発問等の手立てを探っていきたいと思います。　（坂本　真友香）

中学校１年「地域の食材を生かした調理をしよう」

「身近な食材を使うよさはなんだろう」という問いをつかませるために、光市の特産物のいりこからとっただしと顆粒だしとの試飲の場を設けました。子どもは、二つのだしを比較し、それぞれの味の特徴をつかむことができました。しかし、素材からとるだしのよさに気付く子どもは少なかったです。それは生活経験が乏しかったり、多様な家庭での食生活だったりがあると思います。今後は、調理実習などの実践的な機会を増やしたり、地域の食材について調査したりするなどの活動を入れ、「生活文化の継承・創造」という視点の見方・考え方についても働かせることができる手立てを考えていきたいと思います。　（河村　尚代）

音楽科

音楽科では、これまで、「学校テーマソングをつくって、表現を工夫することができる子どもたち」を目指し、カリキュラム及び授業づくりに取り組んできました。これにより、各発達の段階での重点取組内容や、それぞれの学習活動のつながりを意識した授業づくりを行うことができました。しかし、創作技能に大きな差が生まれ、全ての子どもが音楽を楽しめていたかという点において課題が残りました。そこで今後は、歌の得意な子、鍵盤楽器の得意な子、リズム楽器が得意な子というように、それぞれが自分のよさを生かしながら担当パートにアレンジを加え、共通の「問い」を基に、共に一つの音楽をつくっていく楽しさを味わうことのできる子どもたちを目指していきます。

小学校２年「音を合わせて楽しもう」

～主教材「あえてよかった」（高丸とも子作詞／橋本祥路作曲）～

本題材では、小学校低学年段階での重点取組内容であるリズム感の育成を柱とし、拍子を感じ取りながらリズムを工夫して演奏するよさや面白さを味わわせることをねらいとしました。その学習活動の意欲付けと見通しをもたせるために、「どうすればかっこいいリズムになるのか」という問いをもたせたいと考えました。そこで、プロの演奏を視聴させ、自分たちのタンブリンの演奏と比較させました。子どもは、プロの演奏のような「かっこよさ」をめざし、音楽的な見方・考え方を働かせながら、楽しんでリズムの工夫を行うことができました。

（門田　集二）

外国語活動・外国語科

外国語科では、子どもが「伝えたい」という願いや思いをもち、「どのように表現するのだろうか」「どの表現を用いるとよいだろうか」という問いをつかませていきたいと考えます。そのために、コミュニケーションの目的や場、状況を明確にした場面設定をしてきたいと思います。小学校の外国語活動・外国語科では、様々な表現を獲得できるようにインプットを、中学校の外国語科ではその表現を即興的に使えるようにアウトプットを重視していきたいと思います。また、子どもたちにコミュニケーションを図る楽しさや喜びを実感させていきたいです。

小学校４年「お気に入りの場所を紹介しよう」

「好きな場所を伝える表現にはどのような違いがあるのだろうか」という問いをつかませるために、HRTがALTに３種類の英語表現を用いて、校内の好きな場所を伝える場面を設けました。子どもは、状況と英語表現を照らし合わせながら好きという表現の違いについて推測しました。そして、チャンツやゲームで練習を重ね、自分の思いに合う表現を選んでALTや友達に自分のお気に入りの場所を伝えていきました。

（宇田川　祐子）

中学校３年「Daily Scene4 道案内」

「道案内の最中に、相手から目的地周辺の情報について不意に聞かれた際、既習の英語表現を用いてどのように伝えるとよいだろうか」という問いをつかませるために、本時では、JET が ALT を目的地に案内することに加えて目的地周辺のお勧めの場所を伝える場面を設けました。子どもは、相手にお勧めスポットを伝えるにはどのような英語表現を使用したらよいだろうかという思いをもち、ペアやグループで既習表現を用いてどうにか相手に情報を伝えようとしていました。今後は、既習表現を状況に応じて使用できるように学習内容のアウトプットの練習にも工夫をしていきたいです。

（梅田　彩味）

特別の教科　道徳

道徳科では、今後も、人間が生きていく上で出会う様々な諸課題を、自分の事として捉えて考えようとする姿、人間としての生き方を考えようとする姿を、「問いをつかんだ姿」とし、多様な指導方法の在り方やつながりを研究していきたいと考えています。

小学校２年「すがすがしい心」

子どもに「どうして、ころきちは音楽を演奏したのか」という問いをつかませる手立てとして、津波にあって絶望したころきちの気持ちと対比して教材の中で話し合いたいことを交流させました。子どもは、「どうして、ころきちはもみじを演奏したのか」、「どうして、お母さんはバイオリンを渡したのか」という疑問をもち、美しいものと教材の人物との関わりについて、意欲的に探り始めました。今後は、子どもそれぞれの問いを全体で練り上げる手立てや教材への関心のもたせ方について研究を進めていきたいと思います。

（久保田　高嶺）

中学校２年「国際社会における日本人としての在り方」

子どもに「世界に貢献できることを考える中で、私たち日本人はどんな考え方を大切にしていくことが望ましいのか」という問いをつかませるための手立てとして、世界の中で難民が置かれている現状を具体的に示し、多面的・多角的に考える場を設けました。子どもから、日本人として具体的に何ができるのか、どのような考えが大切なのかを見出そうとする姿が見られました。今後も、人間が生きていく中で出会う様々な諸課題を、自分の事として捉えて考えようとする姿を、問いをつかんだ姿とし取り組んでいきたいと考えています。

（藤永　啓吾）

授業について語り合う会 in 光

2019年8月9日（金）
授業ごくり講座・講演

講演講師　山口大学教育学部　講師　熊井将太先生

詳しい案内は、7月に各校に郵送いたします。また、本学園のWEBサイトにも掲載いたします。
なお、本会も、教員免許状更新講習の対象となります。

お問い合わせ先　〒743-0007　光市室積八丁目４番１号

小学校
TEL.(0833)78-0124　FAX.(0833)75-1507
http://www.hikari-es.yamaguchi-u.ac.jp

中学校
TEL.(0833)78-0007　FAX.(0833)75-1509
http://www.hikari-jhs.yamaguchi-u.ac.jp